学習者の苦手意識を解決するアルトリコーダー指導法の研究†
―中学生への指導を中心に―

平井　李枝*
宇都宮大学教育学部*

本論文は、中学校音楽の器楽領域におけるアルトリコーダーの指導法に焦点をあて、生徒が苦手意識を克服し円滑に楽器を演奏できるようになるための方法を、筆者自身の指導経験から分析し論じたものである。調査により生徒のアルトリコーダーに対する苦手意識は、小学校で習得するソプラノリコーダーとの相違点に起因するものが多いことが明らかになった。そのため、苦手意識の原因を明らかにし、解決するための方法を考察することで、それらを克服し生徒が楽しく学び演奏できるような指導方法を実践を通して研究した。

キーワード：音楽授業、リコーダー、中学校音楽、器楽、苦手意識

1. はじめに

本論文は、中学校の音楽科授業のうち、器楽領域のアルトリコーダー実技習得に焦点をあて、苦手意識を持つ生徒たちの円滑な実技習得を実現するためのリコーダー指導法を確立することを目的として実践的に研究したものである。

筆者は2005年から2014年までの9年間、東京都に所在する私立の中高一貫教育学校（渋谷教育学園渋谷中学高等学校）の音楽科教員として、中学生及び高校生に音楽授業を行ってきた。筆者の勤務先は男女共学校で、1学年約200名の生徒たちは中学受験を経て入学していた。東京都内を中心に千葉県、埼玉県、神奈川県と幅広い地域から通学していたため、生徒たちが小学校で受けた音楽授業は多種多様であったことが前提となって授業を行っていた。小学校を卒業して、中学1年生になった生徒たちの音楽授業において、歌唱活動は大変円滑に行うことができた。歌唱活動を大変好み、大きな声で楽しそうに歌っていた。授業時間が終了しても取り上げた曲を反復練習し、歌いながら教室に戻る姿が見られた。

一方、器楽領域ではアルトリコーダーの教授において、生徒の演奏技能習得速度に格差が生じることに苦労していた。その要因として、アルトリコーダーに苦手意識を抱く生徒が大変多く、そのため、技術習得に時間がかかることが多かったことが挙げられる。生徒たちのアルトリコーダーへの苦手意識の原因を究明するため、筆者は9年間中学1年生に対して、アルトリコーダーへの意識調査を行った。その結果、苦手意識の根源が明らかになり、それを解決する指導法の確立が最重要課題であるとした。上学年でのリコーダー演奏技能習得状況から分析し、アルトリコーダーの学習には導入期の指導が何よりも重要であると考えたからである。導入期の円滑な学習こそが中学高校の音楽授業での器楽演奏活動の充実につながるのである。

そこで、中学生のアルトリコーダー演奏技術習得の格差をなくすための指導法について、苦手意識の原因となっている事項の分析とその解決方法、さらに、アルトリコーダーの技能習得に効果的な指導法と教材開発を9年かけて教育実践を通して研究した。

2. アルトリコーダーの導入と苦手意識の根源

小学校でソプラノリコーダーに慣れ親しんだ生徒たちに、中学1年生の音楽授業で器楽領域として初めてアルトリコーダーを配布したとき、生徒たちはまず、ケースの大きさに驚いていた。そして、ケースを開けて「なんで3つに分かれているのかな」とじっ

---

† Rie HIRAI*: A Study on Teaching Method of Alto Recorder to Solve the Student's Weak Point. —Focusing on junior high school students.—
Keywords: Music, Recorder, Junior high school, Weak point.
* School of Education, Utsunomiya University
（連絡先：rie@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

と眺めている。アルトリコーダー組み立てて、吹いてみようとしたとき、「うわ〜、大きい！」「ぜんぜん指が届かない」「なんだか難しそう」とこれまでと異なる感覚に大いに戸惑う光景を、筆者は毎年目にした。さらに授業を進めるうちに、小学校でソプラノリコーダーは好きだったのに、アルトリコーダーに苦手意識を抱く生徒が多数見られたのである。

(1) アルトリコーダーのイメージ調査

9年間、毎年、中学1年生にアルトリコーダーについてアンケートを実施したところ、様々な事柄が明らかになった。原因を集約したところ、以下の6つの点が特に生徒たちの困惑と苦手意識の基となっていたことが明らかとなった。

①楽器が大きい、長い
②組み立てが大変
③息が続かない
④指が届かない
⑤想像した音と違う音が出る
⑥指使いが複雑すぎてわからない

生徒たちは第一印象の時点で、小学校で親しんだソプラノリコーダーと比較してしまう。そして相違点を見つけ出し、上記のような感覚を抱くため、苦手意識が大きくなってしまい、以後の学習に支障をきたすことが多々あった。次項では生徒たちの印象について詳細とその原因を分析し、解決方法を考察することにする。

(2) 苦手意識の原因の分析と解決方法

①楽器の大きい、長い

アルトリコーダーは小学校音楽授業で取り組むソプラノリコーダーより、サイズが大きく長く太くなっている。小学校では大抵の場合3年生からソプラノリコーダーに親しんでおり、4年間の積み重ねが、アルトリコーダーの大きさへの印象に作用しているものと考えられる。ソプラノリコーダーは全長約33センチメートルで、アルトリコーダーは約48センチメートルであり、約1.5倍であることから、その違いは明確である。また生徒の体格差なども大きさに対する困惑が生じる原因となっている。

②組み立てが大変

生徒たちにとって、ソプラノリコーダーとアルトリコーダーの相違は、組み立て方にもある。本来リコーダーは木製の楽器であるが、ソプラノリコーダーもアルトリコーダーも学校で使用する教育用楽器は、ABS樹脂製のものがほとんどである。教育現場で使用するため、比較的安価であることと、メンテナンスを容易にするため日本では樹脂製が普及している。実際、筆者の体験からも、リコーダーのにおいや水滴が気になる生徒などには中性洗剤で洗うよう指示したことも度々あったため、極めて合理的な選択と言える。9年間で1名のみ、オランダ製の木製リコーダーを持参した生徒がいたが、日本の気候に合わず温度と湿度の変化に敏感で、合奏時の音程の調和に不都合があるうえに、手入れが大変なため、本人の希望により結局樹脂製リコーダーを注文したことがある。

樹脂製のリコーダーの場合、基本的には3分割で作られており、これはソプラノリコーダーもアルトリコーダーも同様である。しかし、ソプラノリコーダーは約33センチと短いため、分解せずにそのまま収納できるようになっているため、子どもたちは組み立てが不要となっている。一方、アルトリコーダーは全長約55センチとソプラノリコーダーより17センチも長くなっているため、3つに分解して収納しなければならない。生徒たちは、アルトリコーダーの演奏の前にまずケースから3つに分割されたリコーダーを出して組み立てることから始めなければならない。また部品のジョイント部分は演奏中に抜け落ちることのないように、密着するよう製造されているため、附属品のグリスを使用し、組み立てなければならない。生徒たちの困惑の原因には、グリスで手が汚れてしまうのが嫌だという声も多々あった。さらに、授業終了後、リコーダーを再度分割して収納する際に、頭部側のジョイント部分が引き抜けなくなる現象が度々生じた。必死に引っ張っている姿や、自分の力では引き抜けないために、握力の強い男子生徒にお願いしている姿、さらには二人がかりで、綱引きのように引っ張っている姿などをよく見かけた。このような生徒には、回しながら引き抜くようにというアドバイスと、グリスの必要性について教授することが重要であった。

③息が続かない

アルトリコーダーはソプラノリコーダーと比較して、約17センチ全長が長くなり、また本体も太くなっているために、演奏に要する息の量が多く必要とな

る。中学一年生は小柄な生徒が多いため、ソプラノリコーダーよりも息の量をたくさん必要とするアルトリコーダーでは頭がクラクラするなどの声がきかれるため、息継ぎの位置を工夫すること、しばしば休憩を挟む、換気を良くするなど配慮が必要である。

④指が届かない

アルトリコーダーは全長が長いため、必然的に穴の間隔もソプラノリコーダーより広くなっている。特に最低音のF音を奏するために最下部の穴を右手の小指でふさぐのは、手が小さい生徒にとっては至難の業である。また、生徒たちはリコーダーを組み立ててとりあえず全ての穴を塞いで音を出してみようとするため、どうしても右手の小指が届かず、「指が届かない」という印象を強く持ってしまうのである。またアルトリコーダーはソプラノリコーダーと比較して、穴も大きいため、細い指で押さえると空気が漏れて適切な音が出ないということもある。

筆者の関わった生徒たちの様子では、中学1年生では最下部の穴をふさぐのは困難であることが多いが、中学2年生になると身体の成長と共に手も大きくなることが多く、最下部を塞いで演奏することができるようになる。

⑤想像した音と違う音が出る

アルトリコーダーはF音を基音とするF管のため、C音を基音とするC管のソプラノリコーダーと同様の運指（指使い）を用いると完全5度下の音が鳴る仕組みになっている。ソプラノリコーダーに慣れ親しんだ生徒たちが、ソプラノリコーダーが巨大化したという感覚で同様の運指を用いると、想像と異なる低い音が出るため、困惑の原因となっているのである。

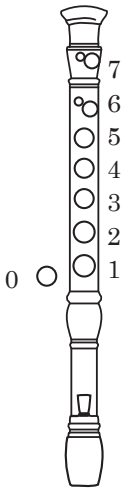
⑥指使いが複雑すぎてわからない

生徒たちへの調査の結果、アルトリコーダーの運指に対する意識は、ソプラノリコーダーに原因があることが明らかになった。ソプラノリコーダーにはジャーマン式とバロック式の2種類があり、それぞれ運指が若干異なる。ジャーマン式は4番と5番の穴の大きさがバロック式と異なっており、バロック式より運指が容易であるため、小学校ではジャーマン式が採用されることが多い現状がある。実際筆者が9年間関わった生徒たちの8割以上は小学校でジャーマン式のリコーダーと運指を使用していた。毎年調査した結果、生徒たちに小学校の頃ソプラノリコーダーでバロック式とジャーマン式のどちらの運指で教授されたかを尋ねる場合、そのような方式自体を知らないことがほとんどであるため「ファの音の指使いが難しかったかどうか」という質問がもっともふさわしいことが明らかになった。

珍しい事例を一点あげると、筆者は小学生時代、バロック式のリコーダーを購入していたが、音楽授業はジャーマン式運指であったという妙な体験をしている。バロック式リコーダーを購入させた教師は、それがバロック式であることを知らずにジャーマン式の運指で指導していたのである。F音などの音程に不整合な点が多々あり、不審に思っていたが、教師が熱心にジャーマン式の運指を教え込むため、大変な違和感を覚えながら演奏していた。このような事態もまれにみられるため、運指を質問事項とすることが最も効率的であるとの結論を得た。

ソプラノリコーダーではジャーマン式が主流を占める一方で、アルトリコーダーはバロック式のみである。このことが、中学生になった途端、今までとは異なる運指を強いられることとなり、生徒たちに苦手意識が生まれる原因となっているのである。ごく一部でソプラノリコーダーをバロック式で教授された生徒は、アルトリコーダーへの運指に抵抗がなく、以降の学習が円滑に進んでいた。

リコーダーの学習にはリコーダーの穴番号を覚えることが必要不可欠である。



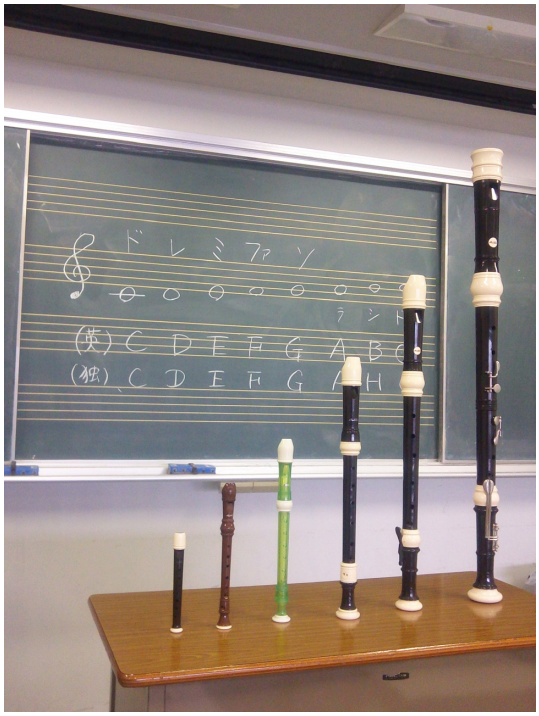
【図1】 アルトリコーダーの穴番号

これはソプラノリコーダー学習時も同様であるが、小学生の場合は耳から聴いて感覚的に演奏していることも多いため、穴番号が身についていないことが多かった。特に、リコーダーの裏の穴が0番という事を知らない生徒が多いため、導入期での学習を徹底させることが以降の学習の円滑化を図るうえで重要であった。

ソプラノリコーダーもアルトリコーダーもリコーダーの穴番号は共通である。（図1参照）0番から3番までを左手、4番から7番までを右手で塞ぐ。筆者の授業では、リコーダーの奏法指導の際、口頭で運指を伝える際は穴番号での指示が最も合理的であった。

2. アルトリコーダーへの興味を引き出す工夫

筆者は、アルトリコーダーの学習時に、生徒の興味を引き出すため、様々な音域のリコーダーを教卓に並べて比較観察する授業を実施していた。6種類の音域の異なるリコーダーを順番に並べ、比較することで自分の演奏するアルトリコーダーをより深く理解させるねらいがある。以下に写真を掲載する。



【写真1】 授業でのリコーダーの比較の様子

【写真1】は音楽室の前方の教卓の上に6種類のリコーダーを立てて並べた様子である。リコーダーは左から、クライネソプラニーノリコーダー、ソプラニーノリコーダー、ソプラノリコーダー、アルトリコーダー、テナーリコーダー、バスリコーダーとなっている。

各種リコーダーの提示方法には様々検証したが、寝かせておく場合は転がってしまい、また後ろの生徒には全く見えないという不都合があり、立てて並べる方法が最適であるとの結論を得た。（立てて展示する場合、楽器が倒れないように配慮している。）

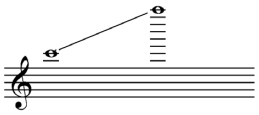
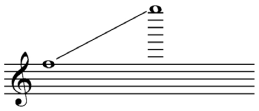
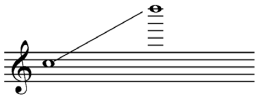
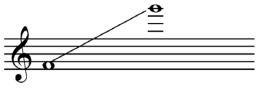
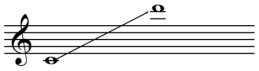
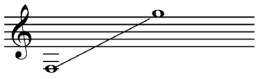
リコーダーの全長の違いを視覚的に認識させる目的では、楽器を立てて見せることが重要であり、この方法は生徒に興味関心を引き出すために効果を発揮した。

左端のクライネソプラニーノリコーダーからバスリコーダーまで、長さ順に並べている。このように実際に各種リコーダーを比較してみると、生徒からは毎年次のような声が挙がった。

・クライネソプラニーのは小さくて、まるでおもちゃのようだ。子供用みたいだ
・ソプラノリコーダーと比べてアルトリコーダーは大きいと思ったが、もっと大きなリコーダーがあることに驚いた。
・テナーリコーダーやバスリコーダーは大きすぎてとっても難しそう。アルトリコーダーでも苦労しているけれど、もっと難しそうなリコーダーがあるのだから、まだアルトのほうが吹けそうな気がする。
・テナーリコーダーとバスリコーダーはどうにも指が届かない気がするので、押さえるための道具が付いているのかなぁ。
・どんな音がするのか比べて聴いてみたい

このような感想を持つ。そして、それぞれのリコーダーについて、筆者が全て同じ運指で演奏して見せると、音域の違いに気づくのである。管の長さと音域の関係について、考えることができるようになる。その上で、クライネソプラニーノリコーダー、ソプラノリコーダー、テナーリコーダーの最低音がC音であることをピアノを用いて比較しながら認識させ、3種類のリコーダーが1オクターヴずつ低くなる関係にあることに気づかせた。同様に、ソプラニーノリコーダー、アルトリコーダー、バスリコーダーの最低音がF音であることをピアノを用いて認識させ、3種類のリコーダーが1オクターヴずつ音域が

低くなることに気づかせた。その後に、リコーダーの管の長さと音域の関係について考察させる時間を設け、オクターブ低くなるとリコーダーの管の長さがおよそ2倍になっていることに気づかせた。その結果、アルトリコーダーの運指を習得することで、ソプラニーノリコーダーとバスリコーダーも演奏できるかもしれないことに気づかせることで、アルトリコーダーの演奏技能習得への意欲を引き出すことができた。

名称	全長	基音	音域（五線譜は実音表記）
クライネソプラニーノリコーダー	16.5cm	C管	c3-a4
			
ソプラニーノリコーダー	24.5cm	F管	f2-g4
			
ソプラノリコーダー	33.2cm	C管	c2-g4
			
アルトリコーダー	47.7cm	F管	f1-g3
			
テナーリコーダー	64.4cm	C管	c1-d3
			
バスリコーダー	98.5cm	F管	f-g2
			

【表1】 リコーダーの種類と音域

さらにここでは鑑賞教材として様々な音域のリコーダーを使用したリコーダーアンサンブルの楽曲などを聴かせることで、より興味を持たせることができた。この場合はCDなどの聴覚教材よりビデオ、LD、DVDなどの視聴覚教材を用いることが効果的であった。

【表1】は前述の6種類のリコーダーの名称、全長、音域、実音表記による音域の五線譜を表にまとめた者である。このような表を配布することで、生徒たちはクライネソプラニーノの最高音の高さに興味をししたり、バスリコーダーの最低音との差を数えたりしながら、リコーダーへの理解を深め、アルトリコーダーへの学習意欲につなげることができた。

3. 読譜と運指の関係

中学生のアルトリコーダー指導で特に注意を要したのは、読譜と運指の関係であった。これは、ソプラノリコーダーとアルトリコーダーが完全5度下のF管であることに起因している。導入時に自由にアルトリコーダーを吹かせてみると、ジャーマン式ソプラノリコーダーと同様のイメージで演奏していることに気付いた。ソプラノリコーダーが大きくなった感覚で、何の違和感も覚えずに、大層上機嫌で小学校で習い覚えた楽曲を演奏するのである。そして生徒たちは自分が演奏している曲が実は完全5度下の調で奏でられていることを全く認識していないことがわかった。これは生徒たちが相対音感(移動ド)であることをあらわしている。実際に筆者が9年間指導した経験では、相対音感の生徒が9割を超えており、ごく一部のピアノやヴァイオリンなど専門教育を幼少期から受けている生徒のみ絶対音感をもっていた。

アルトリコーダーの導入期は、生徒たちが相対音感であることを前提に、ソプラノリコーダーのソ（G音）の運指がアルトリコーダーのド（C音）の運指であることを理解させるために苦心した。「ドを吹きましょう」と指示すると、0番と2番の穴をふさぐべく自然に指が動いてしまう生徒が多く見られた。様々な実践の結果、運指の定着にもっとも効果を発揮したのは、ピアノを用いる指導法であった。ピアノを用い、教師がリコーダーで演奏すべき音を奏で、生徒が同じの音を奏でるという方式の指導が効果的で、この方法によりアルトリコーダーの導入

期の必須事項であるドレミファソの運指を早く定着させ、ソプラノリコーダーの運指から脱却させることに成功した。

【写真2】　アルトリコーダーの授業風景

【写真2】の授業風景は筆者が教室前方（左上）のピアノを用いてリコーダーで演奏するべき音を示し、生徒がリコーダーでその音を吹きながら運指を確認している風景である。

筆者の9年間の教育研究により、アルトリコーダーの技能習得速度が読譜力と密接に関係していることも明らかになった。

中学校音楽の器楽領域の教科書では【表1】に掲載したような実音表記ではなく、1オクターブ低く表記している。これは高音部の下線表記による読譜難度を緩和する目的がある。アルトリコーダーの導入期では、0番から3番までの穴をふさぐことで演奏できる左手のみの運指による《喜びの歌》や《かっこう》などを取り上げる。このような楽曲はドレミファソのみで作曲され、一見すると非常に簡単である。しかし、読譜が苦手な生徒にとっては、小学校で慣れ親しんだソプラノリコーダーとは異なる楽器で、新たに楽譜を読んで演奏しなければならず、大変困難な活動に思えるのである。歌唱活動では優秀な成績で音楽が得意であると思われる生徒がリコーダー演奏では不得手となることが多々生じた。これは、歌唱活動では耳で音を聴き、歌詞を見ながら歌うことで音楽を習得していたことを示している。アルトリコーダー演奏には歌詞がなく、五線譜から音符を読みリコーダーの運指を考え息を吹き込んで演奏しなければならない。読譜力がアルトリコーダーの習得の第一関門になり、苦手意識の原因となっていたのである。そのため授業では読譜を徹底することが、演奏の際の運指を考える前に重要となる。

リコーダー演奏は、楽譜を読み、リコーダーの運指を考え、息をコントロールしながらリコーダーを奏するという3つの要素を行わなければならない。読譜力はアルトリコーダーの習得に不可欠であるため、固定ド唱法により演奏する楽曲を反復して歌唱することが、円滑な技能習得に効果を発揮した。

さらに読譜を苦手とする生徒には、楽譜に音名を記入させ、誤りがないかどうか教師が確認するなどの支援が重要である。

【写真3】　ピアノを使用してアルトリコーダーの音程と運指を確認している様子

4. 運指定着の効率化

アルトリコーダーの運指はバロック式のため、ソプラノリコーダーよりも難易度が高いことは前述の通りである。運指について、筆者は様々な方法を試みた。

①運指表を用いた音階練習

音階練習はある程度の効果を発揮したが、中学生には音階練習で使用した運指を楽曲演奏と関連付けることが困難であった。

②楽譜に音名をカタカナで書き入れる

読譜の項で述べたが、読譜ができることとアルトリコーダーの運指を正しく実践できることはメカニズムが異なっていることが明らかになった。読譜ができても塞ぐべき穴がわからなくては、音楽にならない。

③必要な運指の掲示

課題として与えた楽曲を演奏するのに必要な音の

運指の図を拡大して掲示するなどしたが、楽譜を見ながら黒板に掲示されたものを見るという2段構えのため、習得までに時間を要した。

④指導者による運指の実演

40人規模のクラス単位の授業において、教師がアルトリコーダー運指の見本を実践しても、指の上げ下げが離れた席から見ると理解しがたく、あまり効果がなかった。ただし、リコーダーの音色の変化やフレーズ、アーティキュレーションなど音楽的な表現に関する指導は、教師による範奏が効果を発揮した。

⑤新たな教材の作成

①から④までの方法では、生徒一人一人の演奏技能レベルに格差が生じたため、新たな教材を作成することにした。まず、リコーダーの運指を問うプリントを用意した。この教材はリコーダーの絵に生徒自身が塞ぐべき穴の部分に色を塗りつぶす方式を用いたものである。生徒たちは色塗りを好んで実施したため、効果的であった。次に読譜と運指を関連付けるため、楽譜に音名とリコーダー運指の奏法を生徒自身が記入できる方式のワークシート教材を作成した。これは全ての生徒に実施し、まず演奏の前にワークシートに記入させ、筆者が正誤を精査する。正しく記入できた者から、リコーダーの練習に取り掛かるというものである。このワークシートは生徒たちに好評で、さらに教師としても評価の対象として相応しいものであった。完成したワークシートを見ながらアルトリコーダーの練習をすることで、技能向上に成果が見られた。特に読譜に苦手意識を持っており、さらにリコーダー演奏を回避しようとしていた男子生徒たちにとって、わかりやすい教材であることが認められた。全く演奏できなかった生徒たちが、このワークシート教材を使用することによって、課題曲を吹きこなすことができるようになったのである。1曲仕上げることができると、自信につながり、以降の学習意欲につなげることができた。

5. 演奏可能音域の拡大とサミングの技術向上

リコーダーで高い音域を奏する場合、0番の穴を全て塞がずに少し開けるサミングという運指がある。裏の穴を左手の親指で塞ぐのだが、少々爪を立てるようにして隙間を開けるのである。サミングの技術は幅広い音域での演奏を実現するために不可欠であるが、生徒たちには習得が非常に難しいものであった。サミングは運指表などで表記される際、半分だけ開けるかのように思われがちなことが原因である。

特にD音が最難関であった。D音（d2）の運指は0番サミング、1番2番を塞ぐものであるが、生徒たちはどうしてもF#音（f#1）が出てしまうと言って、筆者に「このリコーダー壊れています」「水滴が詰まって音がおかしくなりました」などとと訴えに来るのである。これは毎年恒例の光景であり、特に教科書に掲載されている《威風堂々》を演奏する際に頻出した。この現象は、リコーダーの故障ではなく、サミングの奏法が正しく実施されていないことに由来している。サミングの奏法指導では「少しだけ開けましょう」「少し爪を立ててみましょう」などさまざまな指導を実施した。その結果、効果的な手段が明らかになった。

セロハンテープを用意し、サミングで高音が適切に演奏できる位置で0番の穴を塞ぐようにテープを貼るのである。教師が見本を見せながらセロハンテープを適切な位置に貼ることで、サミングの技能向上に有効な効果を見ることができた。サミングがうまくできることによって、D音のみならず、それ以上の高音域も円滑に習得できるようになり、広い音域を必要とするレパートリーを吹きこなせるようになる効果が見られた。

6. アクティブラーニングの有用性

アルトリコーダーの習得においては、個人差が顕著であった。そのため、授業時間内に生徒の活動を主体とするアクティブラーニングの時間を設けることが技能習得に効果を発揮することが明らかになった。優れた技能を持つ生徒が苦手な生徒に教えるなど、技術の教えあいや、新たな運指の発見など、授業ごとに目的を与えたうえで、グループに分かれて活動を行うことが技能向上の相乗効果を生んだ。

【写真4】　アルトリコーダーのアクティブラーニング

【写真4】はアルトリコーダー学習時のアクティブラーニングの様子である。いくつかのパートに分かれて合奏する楽曲の練習や、新しい楽曲への挑戦、運指への探求など、授業時間内で生徒自身が考え、自発的に学習する時間を設けた。ここでは生徒同士がわからない箇所を教えあったり、一緒に演奏して間違いがないか確認したりしながら、技能を向上させていく効果が確認できた。

7. むすび

9年間にわたる筆者の教育研究の結果、中学生のアルトリコーダー指導において、その根底となるのは小学校時のソプラノリコーダー経験であることが明らかとなった。ソプラノリコーダーとアルトリコーダーの相違点に抱く違和感がアルトリコーダーへの苦手意識の原因となっていた。特に楽器の大きさの変化、ジャーマン式とバロック式運指の違いが要因として顕著であった。教師は、アルトリコーダー導入時に、生徒が興味を持てるようなアプローチ方法と課題解決に創意工夫を凝らすことが重要である。

リコーダー技能習得時に課題となる読譜と運指の問題も、ピアノの効果的な活用と、適切なワークシートの作成により、解決することができた。苦手意識をもつ生徒にとって、課題曲を一曲でも吹きこなすことができれば、自信につながり、それが以降の器楽領域に対する学習意欲となることが明らかである。また生徒が主体となって行うアクティブラーニングも、リコーダーの技能習得に効果を発揮した。

今回の研究では中学生を対象としたアルトリコーダー指導法であったが、ここでの分析考察の成果は、小学校におけるソプラノリコーダー指導にも応用が可能である。

今後は、本研究で考案し、教育的成果を発揮したワークシートや教材を、広く教育現場で活用してもらえるよう、さらなる改良を加え、子供たちが楽しんで学習を進められるような合理的で応用可能なリコーダー速習教材として出版するなど、音楽教育に貢献したいと考えている。

8. 参考文献

小原光一ほか
2015『中学器楽 音楽のおくりもの』東京：教育出版.
新実秀徳ほか
2015『中学生の器楽』東京：教育芸術社.
文部科学省
2008『小学校学習指導要領解説　音楽編』
文部科学省
2008『中学校学習指導要領解説　音楽編』

平成29年3月29日 受理